



(吉野山)

## 奈良・酒船石遺跡

さかふねいし

1 所在地 奈良県高市郡明日香村岡

2 調査期間 一 一二〇〇二年（平14）四月～七月  
二 一二〇〇三年一月～三月

3 発掘機関 明日香村教育委員会

4 調査担当者 一・二 西光慎治

5 遺跡の種類 一 宮殿関連遺跡、二 自然流路

6 遺跡の年代 飛鳥時代～奈良時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

### 一 第一九次調査

酒船石遺跡は、多武峯から西に伸びる低位丘陵の先端に位置する。丘陵上には岡の酒船石が存在し、北の谷筋では亀形石造物を中心としている（第一二・一三次調査）。丘陵斜面には砂岩などで造られた石垣や石列が

四重にめぐり（第一・三次調査）、丘陵西裾部分には大型の掘立柱建物や石敷、南北の石組溝などが存在する（第九・一〇・一五次調査）。

今回の調査は天理教岡大教会の改築に伴うもので、面積は約八〇〇m<sup>2</sup>。検出した主な遺構は、四条の南北石組溝と砂岩区画である。

溝①～③は飛鳥宮東辺の基幹排水路であり、七世紀から八世紀にかけて①②③の順に変遷した。これらの石組溝は酒船石遺跡第九・一〇・一五・一八次調査で検出した溝の延長部にあたり、また飛鳥寺南方遺跡（奈良国立文化財研究所、一九九一年）や飛鳥京跡第一五〇次調査（奈良県立橿原考古学研究所、一二〇〇二年）で検出された溝とも一連の可能性が高い。溝①（七世紀半ばから後半）は幅一・八～二・五m深さ〇・三～一mの石組溝。側石として約一mの石材を二、三段積み上げ、底には拳大の川原石を敷き詰める。溝②（七世紀後半から八世紀初頭）は溝①を改修した石組溝で、幅一・三m深さ〇・六m。東側石は溝①の東側石の西側に新設され、溝①よりも小型の花崗岩を四ないし六段に積み上げ、部分的に砂岩切石も転用する。西側石は下から一段分までは溝①の西側石をそのまま利用し、上部二、三段分は新たに三〇～六〇cm大の花崗岩を積み直す。溝③（八世紀前半）は溝②の西側に新設された石組溝である。側石として三〇～六〇cm大の花崗岩を四、五段に積み上げるが、溝①・溝②と比べて乱雜である。この溝は調査区北端で溝②に合流して北流し、その下流の第一〇次調査区からは、靈龜二年（七一六）の荷札木簡が

出土している（本誌第一〇号）。また溝①の東側には、幅〇・四m深

部分の検出であつた。

さ〇・二mの南北方向の石組小溝が存在し、側石に人頭大の川原石を用いている。砂岩区画は溝②の東岸にあり、長さ二・五m幅〇・三mで、コ字形を呈する。水辺に伴う施設と考えられる。

主な出土遺物は、土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・漆付着土器・墨書き土器・獸脚硯・瓦・金環・木製品・木簡・砂岩切石・榛原石などである。

木簡は、溝①から五四点（うち削屑三六点）、溝②から三五九点（うち削屑三三一点）、石組小溝から二点、計四一五点（うち削屑三六七点）出土した。溝①・溝②では特定の場所に木簡が集中する。溝のすぐ西には南北道路が存在するため、東側の近い場所から投棄された可能性が高い。

二、第三次調查

本調査は酒船石遺跡範囲確認調査の一環で、岡の酒船石東側の谷部分に計四カ所のトレンチを設定し、約三〇〇m<sup>2</sup>を発掘した。この

谷部の下流にあたる飛鳥池東方遺跡では、幅約六~七mの人工的に掘削された溝がみつかっており（奈良国立文化財研究所、一九九七年）。さらに下流にあたる飛鳥東垣内遺跡でも、七世紀中頃に遡る幅約10mの大溝が検出されている（明日香村教育委員会、一九九八年）。これらは「日本書紀」齊明二年（六五六）条に記される「狂心渠」の可能性が高いと考えられている。本調査の目的の一つは、その上流

8

一  
第一次調查

本調査では、溝の上流部分が人工的に掘削された溝ではなく自然流路であつたこと、流路の増幅、改修は下流部のみで行なわれていたことが明らかとなつた。なお調査地東側にあたる丘陵端部の酒船石遺跡第四次調査では、七世紀後半頃の掘立柱建物を検出しており、木簡との関連が注目される。

調査の結果、各調査区で自然流路を検出した。木簡は酒船石のある丘陵東側の裾部分にあたる二区の地表下約三mから、多量の木屑とともに一点が出土した。周囲の状況より、木簡は谷の上流から流れてきたと考えられる。木簡以外の出土遺物は、土師器・須恵器・木製品・砂岩切石・榛原石などである。

(1) 溝  
当月  
三日  
□

(153)×(12)×5 081

160

160

2002年出土の木簡

(4)	□当麻公□	091
(5)	□馬カ□	091
(6)	□弥カ□	091
(7)	溝(2)	091
(8)	「十一月十六日葛人十五」	297×24×8 011
(9)	□支県主乙麻	(87)×(18)×3 081
(10)	□刀支県	141×25×5 032*
(11)	牟義君	(56+56)×35×3 081
(12)	日置 春マ	(48)×(15)×3 081
(13)	小山中	091
(14)	「小乙□」	091
•	□□	
•	「前前面白」	

(1)は右辺は原形を保つが、左辺は文字の中央でまっすぐ割れており、意図的に縦に割いて廃棄処分されている。上下は折損。「三日」の上の文字は「十」もしくは「廿」である。(2)は「しに坐します大夫に…」という内容の文書木簡に由来する削屑。「大夫」の次の文字は「在」の可能性がある。(4)～(6)は人名を記した削屑である。『日本書紀』同年一〇月己卯朔条、本木簡はそれ以前のものとなろう。

(7)は、上下はキリオリ、左右は削り調整の完形木簡である。長方形ではなく、右辺が左辺に対し若干短い。文字は木簡の上半に六朝風の闊達な書体で記されている。「十六日」という日付、「十五



—(8)



二(1)



—(14)



—(9)



—(10)



—(11)



—(4)



—(7)

という数字から、「葛人」の十一月前半の上日数を記した可能性が高い。下半部が若干薄く手で持ちやすいようになっており、上日を上申する際の儀式での使用が想定できるかも知れない。

(8)は上端を折損するが、「□直若狭」は人名とみて差し支えなかろう。月の左の数字は、それぞれの月の上日数の可能性がある。長屋王家木簡にも同様の事例があり(平城京木簡)二、二〇八四号)、やはり一月からはじまる。その理由として、季禄・考課との関係が考えられる。淨御原令制下の状況は不明であるが、大宝令以後の段階では、前年八月一日から当年七月三〇日までを考課の一年度とした上で、八月から正月までの上日が一二〇日以上あれば春夏禄を、二月から七月までの上日が一二〇日以上あれば秋冬禄を支給することになつていた。下端は廃棄の際の二次的切断を被つているが、本来的には一月から七月までの半年分の記載があつたと考えられる。また右辺は割れているが、欠損はわずかにすぎないであろう。木簡の割付方法などからみて、短冊形の板材右行に官人の名前と二月以下の月名を書いた上で、各月の上日に関わる資料などを参照しながら、左行に上日数を記していくと推測できる。ただし右行と左行は同筆である。この種の木簡は官人一人ごとに作成されていたのである。

(9)~(12)は人名を記した削屑で、これら以外にも多数出土している。

(9)~(12)は人名を記した削屑で、これら以外にも多数出土している。(10)の刀支県主は初出である。(11)の「牟義」は、「身毛津」「牟宜都」などとも表記される。いずれも美濃国出身の氏族名である。この種の削屑は、(12)のような複数の人名が書かれたものがあることから、歴名簡に由来するものが多数含まれていると考えられる。

(13)は冠位の書かれた削屑。(13)の「小山中」は天智三年(六四)から天武一四年(六八五)まで使われた冠位。(14)の上端は原形を保つ。三文字目は残画から「上」もしくは「下」であり、「中」とはならない。「小山上」「小山下」は大化五年(六四九)に制定された冠位で天武一四年まで使われた。これらは溝(2)の年代を考える上で重要であり、(16)の習書「評」もこの年代観に矛盾しない。

(15)は四周いずれも原形をとどめないが、残画と内容から「前日」形式の文書の習書木簡とみて間違いない。

(17)の二片は直接接続しないが、形状・書体などから、同一簡と判断した。これもいわゆる前白木簡である。二片ともに上下は二次的に切断されており、廃棄処分に伴うものと考えられる。

(18)は完形の荷札木簡。今回の調査区内では唯一出土した荷札である。左右は削つているが、上下はキリオリのまま。サトの表記は、大きな傾向として天武一〇年(六八二)以前は「五十戸」、天武一二年以後は「里」に変化する(奈良文化財研究所紀要二〇〇三)。従つて、(18)も恐らくは天武一〇年以前のものと考えられる。「三重評青女五十戸」は後の伊勢国三重郡采女郷。『続日本紀』宝龟四年(七三三)五月辛巳条には、古風な氏姓の表記を改める太政官判が収録

されており、「費→直」などとともに「青衣→采女」という例があるがっている。「青衣」姓はこれまで知られていないが、「青女」と書かれる場合があつたことが新たに判明した。「青女」「青衣」と書いて「ウネメ」と訓んだのである。

今回出土した木簡の特徴として、文書木簡に由来すると考えられる削屑や小断片が多数出土している点を指摘できる。遺跡の近辺で、木簡を再利用のために削つたり、廃棄のために割截・切斷したりするなど、木簡を使った事務作業が行なわれていたことを示していくよう。酒船石遺跡第一〇・一八次調査では、石組溝の東側で掘立柱の建物や塀などが検出され、この地域には官衙域が想定されている。

今回の文書木簡の大量出土はこの点で注目に値する。

## 二 第二三次調査

(1) • 「▽ 皮伎麻五戸布 ▽」

131×20×6 031

四周围に削り調整を施す。上端の切り込みの右上部に欠損があるが、ほぼ完形である。上下ともに圭頭状を呈する。形状の類似した木簡としては、飛鳥池遺跡出土の「陽沐戸海マ佐流／調」と書かれた荷札木簡があげられる(本誌第二号)。表裏で字体が異なり、異筆と

判断できる。「皮伎麻」(「ハキマ」と訓むか)は地名であろうが、比定地は不明である。「五戸」からの貢進荷札は春米に関するものが多のが特徴的である(東野治之『日本古代木簡の研究』塙書房、一九八三年)。近年では一條大路木簡の若狭国遠敷郡青郷から貢進された贊の例なども知られるが、ここでは布となつており珍らしい。布を貢進する際には、布そのものの両端に貢進主体などを墨書するのが通常であるが(賦役令調皆隨近条)、荷札を作成する場合もあったことがわかる。木簡の時期は、形状・書風・表記方法などの点からみて、七世紀の可能性が高い。

## 9 関係文献

明日香村教育委員会『明日香村遺跡調査概報 平成一四年度』

(1)〇〇四年刊行予定

(1~7・9 西光慎治、8 市 大樹(奈良文化財研究所)』